

は し が き

センター長 江 口 修

加速度という言葉がありますが、最近の大学改革をめぐる動きを形容するのに一番ぴったりするように思われます。百家争鳴の感を呈しながらも、一昔前とは違って議論だけでは済まず、同時に改革の実行を迫られているからでしょうか。しかし先行した改革も必ずしも期待通りの成果が得られているとは限らないようで、先行きの不透明感は、「競争」と並んで時代のキーワードとなっている「透明性」を曇らせてしまうほどのようです。しかしこのような時代にあっても、教育には農業に似たところが必ずあるのではないのでしょうか。学生の学力だけでなく人格も耕すように陶冶する、その基本を忘れた改革論議は空しいような気がしてなりません。本センター広報もはや5号、センター設立時の改革の息吹もようやく落ちついてきましたが、同時にさまざまな問題点も浮かび上がってきました。十年ひと昔という言葉が死語になるかのような変化の加速ぶり、大学に対する時代の要請を見据えつつ大学における外国語教育の明日を展望しながら、日々教育という実りの遅い営みに従事する時代がしばらく続きそうです。さらに加速という点では、インターネットによる情報交換の猛スピードでの広がりぶりには驚嘆させられます。専門研究のメーリングリストを覗くと、新幹線の中から発信したメールや、在外の研究者の現地でのリアルタイムな研究動向報告など、昔では考えられないような環境が出現しています。かつては地域的な情報疎外の問題がありましたが、これからはインターネットや電子メールが使えるか使えないかという個人的なレベルでこの問題が起きそうな気配すら感じられます。しかし、この分野ではネットワーク上の情報管理のヒエラルキーの問題があるように思います。つまり一見すると、無政府状態とも思えるほどインタラクティブで民主的なインターネットの世界も情報上位者が必ず勝つという冷徹な原則が支配しているからです。性善説と性悪説どちらに立って考えるか、古くて新しい問題がここでも復活してきています。

ともかく、大学改革の動きはますます加速することでしょう。しかし日々の教育現場にまであわただしさや焦燥感を持ち込んではいけません。本言語センターも大学改革の新展開に併せて語学教育も独自の新たな地平をできるだけ早く開拓しなければならないことは言うまでもありませんが、歴史的に見ても、教育問題においてあまりに性急な解決を図るとかえって取り返しの付かない混乱を引き起こしてきた例は枚挙にいとまありません。見方を変えますと、先端的実験とスタンダードの維持との両立をどう図ってゆくかという教育の永遠とも言ってよいアポリアはこれからもわれわれをなやませ続けることでしょう。そのためにも、全国あるいは全世界の本センターと似た立場にある諸機関との連携を強化して行かねばなりません。

さて本センター関係の主だった動きを報告しておきましょう。長年本学で英語教育に当たられ、言語センター設立の最大の功労者である永原和夫教授が平成8年度3月末日をもって定年退官を迎えられます。初代センター長を務められた後も小樽商科大学国際交流センター長として本学の国際交流発展にご尽力いただきましたが、そのご功績はまことにもって偉業と呼ぶにふさわし

いものです。校務多忙にも関わらず、本学出身の教員を組織され在生も含めた教職研修会を定例化なさったのも先生でいらっしゃいます。そのおかげで本学卒業生の教員採用は順調に発展してまいりました。またご専攻のジェームス・ジョイス研究におかれても日本ジェームス・ジョイス協会常任委員を務められ、さらに国際アイルランド文学会 (IASAIL) 日本支部常任委員の重責をも担われるなど、日本におけるジョイス研究発展に多大な貢献をなさっておられます。御退官後も引き続き北海道の地で英語教育に携わられるご予定でいらっしゃいますが、この場を借りてそのご業績を讃えるとともに長年にわたる本学発展へのご尽力そして未熟なわれわれに対する惜しみないご指導に感謝申し上げます。永原先生本当にご苦労さまでした、そしてこれからもどうぞよろしくご教導下さい。

その他、教官の海外出張・研修はいよいよ盛んになってきています。順を追って報告しますと、まず本学外国人教師ダイアン・カマラータ・チャールズワース先生が7月8日から同月24日までアメリカ合衆国ニューヨーク州立大学バッファロー校にて研究資料の調査収集にあたられ、続いて私江口が7月19日より8月14日までパリと南仏を中心に研修、時期を同じくして大島稔教授が7月19日より8月23日まで文部省科学研究費補助金による「環北太平洋の危機に瀕した原住民言語の類型と歴史に関する国際共同研究」の研究分担者としてアメリカ合衆国アンカレッジに実地調査で出張なさいました。8月には高橋純教授が同月6日より27日までフランス国パリで研修の他夏期海外短期語学研修視察でヴィシーにあるカヴィラムを視察なさい、永原和夫国際交流センター長が17日より28日まで、UMAP (アジア・太平洋大学交流) 総会参加の他、本学と学生交換協定を結んでいるオーストラリア、ウーロンゴン大学およびニュージーランド、オタゴ大学を訪問されさらにニュージーランド、カンタベリー大学を視察されました。9月には津曲敏郎教授が5日より23日まで、文部省科学研究費補助金による「環北太平洋の危機に瀕した原住民言語の類型と歴史に関する国際共同研究」の研究分担者としてロシア連邦クラスニヤールに実地調査で出張された他、吉田直希助教授が17日より25日まで University of Central Florida 他において18世紀英文学研究に関する資料調査と現代アメリカ文化研究にあたられました。さらに山田真史教授が文部省在外研究員としてスペインバルセロナ自治大学に10カ月の予定で出張され9月15日離日されました。11月には大島教授が1日より29日まで前述の国際共同研究でカムチャッカに現地調査で出張され、続く12月には下村五三夫助教授が4日から97年1月18日までポーランド科学アカデミーとの共同調査(民族楽器)のため出張なさったほか、斐崙助教授が同月20日より97年1月10日まで南京大学を中心に研修されました。

最後に、本学後援会『緑丘会』の助成行事の一環である国際交流セミナーとして、本センター主催でニコラス・グリーン、アイルランドダブリン、トリニティーカレッジ教授の講演『アイルランド文芸復興と独立運動』と本センター関係者とのスタッフセミナーを開催したことをご報告しておきましょう。そしてこのセミナーも永原先生のご尽力の賜物でありました。